

# あんげろす

所員に復帰して

大西 晴樹

4月より経済学部教授となり、本研究所の所員に復帰することになった。3月末まで10年間行政職の任にあったので、研究の方はお寒い限りであった。研究する仲間を傍目で見ながら、それでもこの間、キリスト教学校教育同盟百年史の編纂、また明治学院百五十周年があり、近現代日本のキリスト教教育史には多少は関わってきた。最近、それらの研究動向を織り込んだ講演集を刊行するもりで「「ピューリタン」ヘボンーその光と影ー」という論考を脱稿した。そうしたらどうだろう。9月30日より12月23日までNHKラジオ第2放送、毎週火曜日午後8時半から9時（再放送毎週水曜日午前10時から10時半）の「歴史再発見」という番組で「ヘボンさんと日本の開化」というテーマを話してくれというのではないか。いまはテキスト作りに没頭する毎日である。



渡辺祐子

小暮 修也

わたしは、昨年度1年間の特別研究休暇を終えて、キリスト教研究所所長職に再登板することになりました。再登板と言っても、前回は2年任期の半分だけを務め、残りの任期を司馬前所長にお任せし休暇に入りましたので、まだまだ半人前ではありますが、学内外に果たすべき研究所の使命や所長の務めについて思いめぐらしながら、任期を全うしたいと考えています。今年度は、一昨年から計画を進めていた研究プロジェクトの刷新をさらに進め、所員のみならず、客員研究員、協力研究員の方々のご協力、ご支援を賜りながら、「明学」の中にある「キリスト教」の「研究機関」にふさわしい研究活動を通して、広く議論の場を提供してゆきたいと考えています。各プロジェクトでは、さまざまにユニークかつ重要な試みが計画されています。どうかみなさま、それら一つ一つの活動に積極的にご参加くださいますようお願い申し上げます、所長就任のあいさつといたします。

(わたなべ・ゆうこ 教養教育センター教授、所長)

2014年3月に発表された第86回アカデミー賞の作品賞には、『それでも夜は明ける』(12YEARS A SLAVE)が選ばれた。この作品は、アメリカの奴隷売買の実話を基に映画化されたもので、それだけでも勇気があるのに、さらにアカデミー賞作品賞を授与するという点にアメリカの意識の奥深さを感じた。

ストーリーは、1841年に遡る。ニューヨーク州でバイオリニストであった自由黒人のソロモン・ノーサップは妻、娘、息子と幸せに暮らしていた。妻が留守のある日、ソロモンは二人組みの興行師にワシントンでの演奏を依頼される。仕事を終え、祝杯を重ねるうちに酔いつぶれると地下室につながれた。そこで、名前を変えられ、鎖につながれて、数人の男女の黒人と共に船に乗せられ、売られていった。ソロモンは奴隷とされたまま、製材所や綿花畑で働かされるが、彼を支えたものは、もう一度家族に会いたいという思いだった。

ところで、一説によると16世紀から19世紀前半の奴隷貿易の歴史の中で、南北アメリカには1500万人を超えるアフリカ人が売られていったという(新大陸に1人を運ぶのに5人は亡くなったという説もあり、そうすると数千万人が犠牲になったと考えられる)。

ソロモンが最初に売られていった先は、牧師で大農園主の家であった。この牧師で大農園主のフォードは、黒人奴隷と白人の使用人の前で神の愛を説いていた。このシーンを観

ているうちに胸が苦しくなった。現実の奴隷制度を放置したまま説く神の愛や、神による人間の尊厳とは何なのだろう、と。また、作品の中では、自由黒人と奴隷黒人が区別されていたが、そもそも奴隷制度そのものが非人間的なものであり、同じキリスト教を基にして黒人解放を訴えたマルティン・ルーサー・キング牧師の言葉が改めて胸に迫ってきた。

\*

昨年、創立 150 周年記念として、明治学院高校では 3 回に分けて連続講演会を行った。高 3 生は、福島第一原発から一番近い教会で、原発事故から脱出して他の場所に教会を再建した佐藤彰牧師のお話をうかがった。高校生の感想として、次のようなものがある。「講演を聞いて、当時の現状に悲しくなりました。大切なペットを見捨てなければならぬこと、家には決して戻れないこと、震災からしばらく時がたっても福島に帰れといじめられること、おそらくまだまだ私たちの知らない苦労があったことでしょう。今回の講演で教会の力、そして教会を復活させた人間の力の大きさを実感しました。」

高 2 生は、長年にわたりホームレス支援に取り組んできた奥田知志牧師の話の話をうかがった。「家があっても、自分のことを励ましたり心配したりしてくれる人がいないことが実は“ホームレス”というのではないか」という指摘に、「自分もそうかもしれない」という子が多く、反響も大きかった。

高 1 生には「愛するとき、奇跡は創られる」という題で、<sup>ソフジャ</sup>宋富子氏から話をうかがった。在日朝鮮人として多くの差別を受けながら、教会に導かれ、イエス・キリストの愛に触れ

る中で、「自分も生きていいんだと励ましを受け、立ち上がることができた」と語り、多くの生徒に感銘を与えた。これらをまとめることは校長としての最後の仕事と考え、講演のテープを起こし、940 枚の全ての生徒の応答カードを見て感想を選び、『灯を輝かし、闇を照らす』（いのちのことば社）として出版できたことは感謝である。

終わりに、今、日本国憲法の解釈改憲、明文改憲が為政者たちの手によって進められている。このことに「信仰告白の事態」として、危機感を持って取り組むことが、現代に生きる私たちの使命ではないかと考えている。

(こぐれ・しゅうや 明治学院学院長、協力  
研究員)



『灯を輝かし、闇を照らす—21 世紀を生きる若い人々へのメッセージ』佐藤彰・奥田知志・宋富子著、明治学院 150 周年委員会編、いのちのことば社、2014 年。

南島のキリスト教信仰を訪ねて  
—奄美群島喜界島の旅—

一色 哲

喜界島は、奄美大島の東方洋上約 30km にうかぶ島で、現在の人口は約 7,700 名に過ぎない。島の中心街は「湾」といい、そこにいると全体的に平坦な島のように思える。しかし、島は東側に向かってゆるやかに登っており、その果ては約 200 メートルの断崖になっている。喜界島はいまでも年平均 2mm ずつ隆起しており、数十年おきに大きな地震が起きている島なのだ。

また、喜界島はかつて「鬼界」島とも表記され、この島より南は大和王権がおよばぬ化外の地とされてきた。998 年には、太宰府から南蛮人(奄美大島の人びとと思われる)を討伐せよという命令が喜界島に伝えられたという。

近年、島の中央部の城久<sup>ぐすく</sup>では、平安から室町時代の遺構より日本本土や中国大陸・朝鮮半島系の土器などが出土している。喜界島は本土と琉球や朝鮮、中国との交易の中継点として栄えた。しかし、1466 年、琉球国王・尚徳の親征を受け、服属した。

それから、喜界島には 48 もの神社・祠がある。また、寺や観音堂も 4 箇所あるが、これは、他の奄美群島や沖縄の島々では、あまり見られない光景だ。この点でも、喜界島の《鬼界＝境界》的特徴がよくわかる。

さて、その喜界島には、現在、4 つのキリ

スト教会がある。奄美のキリスト教といえばカトリックを連想するが、喜界島での伝道はあまり成功しているとはいえない。

プロテスタントは、イエス之御霊教会<sup>あかれん</sup>(赤連)と日本基督教団<sup>おおあさと</sup>(元大朝戸、現湾)、日本ホーリネス教団<sup>けらじ</sup>(花良治)の教会・伝道所があり、『キリスト教年鑑』によると全信徒は 700 名余りとなっている。つまり、統計上は、人口の 1 割近くがクリスチャンということになる(実際の信者数はこれよりも少ない)。

わたしは、2013 年 4 月に喜界島のフィールドワークに出かけた。そこで、ホーリネス教会の創始者である兼山常益の手記の存在を知り、教団の教会(前身は旧日基)では『喜界教会五十年の歩み』を拝見することができた。それらによると、両教会とも、開拓伝道の原動力になったのは喜界島出身の信徒・伝道者であったことがわかった。

ホーリネス教会初代牧師の兼山は、1905 年、バックストンの小田原修養会で受洗し、仕事(「外務省巡査」)のため渡った朝鮮半島で信仰生活を送り、一時期は無牧の仁川メソジスト教会を維持する任を負ったこともあった。

また、旧日基の教会建設のきっかけを作った磐井静治は、台湾からの引揚者であった。台湾で役人をしていた磐井は、1913 年、台南市の旧日基教会で西健二牧師より受洗したが、14 年に母の看病のため帰島した。そして、彼のふるさと大朝戸で直ちに日曜学校を開設し、鹿兒島教会(旧日基)の番匠鉄雄牧師の支援を得ながら教会を発展させた。

この大朝戸という集落は、現在は約 80 名の人口で、終戦後でも 200 名程度だった。

その集落で、戦前期(1915~34年)には79名の受洗者があった。また、戦中と終戦直後の空白期を経て、1956年に福井二郎牧師が赴任すると、7年間に70名の受洗者を出した。これは、まさに集団洗礼といえるような現象である。

しかし、順調に発展を続けていた両教会であったが、1930年代に入ると教会に対して圧力が加えられる。同時期に奄美大島でもカトリックに対する排撃運動が展開されていたが、これらはいずれも奄美群島の軍事要塞化にともなう軍主導の教会に対する弾圧であった。

奄美大島の南にある古仁屋には陸軍要塞司令部が建設され(1923年)、喜界島の空港(1931年建設)も戦争が激しさを増すなか特攻隊の基地になった。

喜界島の両教会では1930年代半ばから官憲が「翼壮(大日本翼賛壮年会)」を動員して迫害が加えられた。そして、1937年には礼拝と日曜学校に対して禁止命令が出された。さらに、1942年には本土のホーリネス教団弾圧の影響で、兼山は警察署に連行され、蔵書100冊余りを押収されてしまう。

こうして、両教会は公式活動の停止に追い込まれていく。しかし、実際には、大戦中も、終戦直後の米軍占領下でも、このふたつの教会の信徒は、教派を超えて、協力しながら喜界島の信仰をまもったのであった。

さて、奄美から沖縄に、そして、先島・台湾に至る地域には共通の信仰が見られるように思う。それは、帝国・日本の周縁部分に位置し、植民地との交流の結果生みだされた、本土のそれとは明らかに違った信仰だ。

本土のキリスト教は、近代化・文明化のた

めであったといわれる。これに比して、南島では、庶民が差別や抑圧のなかで生きる抜くために切に救済を求めるより民衆的な信仰が広範に浸透していた。

その「民衆キリスト教の弧」ともいえるべき南島地域のキリスト教から本土のキリスト教界が学ぶべきことは多いと思う。

(いっしき・あき 帝京科学大学教員、協力研究員)



日本ホーリネス教団喜界キリスト教会=喜界町花良治



日本キリスト教団喜界教会=喜界町湾

## 中国の教会を訪ねて（1）

渡辺祐子

はじめに

私は 2013 年 8 月から 12 月初めまで、途中一週間の一時帰国を挟んで、大連、武漢、南京、上海の各都市に長短合わせて都合 4 か月滞在した。武漢滞在が一番長く、ふた月強、そのほかはほぼ 2 週間で、大連から武漢に行く途中で山東省に寄り、ここにも 1 週間弱とどまった。

たくさんの場所を訪ね、たくさんの人に会い、言葉に表せないほどの好意を多くの友人たちから受け、反面、中国社会の負の側面もだいたい見たり聞いたりした 4 か月だった。感じたことを書き出すときりがないので、ここでは私が訪ねた中国の教会の様子に絞って、在外研究報告の一部としたいと思う。

最初に断っておきたいことが二点ある。一つはこの小論では、プロテスタント教会の状況のみを扱うことである。私は中国滞在中、カトリック教会もいくつか訪問し、山東省ではかつて中国最大規模の教区ともなった九州の教会と修道院を訪れ、そこに住むシスターたちと親しく交流することもできた（写真参照）。抗日戦争、解放、文革をくぐり抜けてきた 90 歳になるシスターと言葉を交わしたことは感動的でした。別れ際に握ったシスターの手のぬくもりも忘れ難い。しかし今回はその経験も含めてカトリックについては言及しない。

二つ目は、この報告が現在の中国の教会やキリスト教事情全般をまんべんなく正確に語っているわけでは決してないということであ

る。中国のキリスト教史を研究していると言っても、私が主に扱っている時代は清末から民国初期で、人民共和国成立以後のキリスト教史を専門としてはいないし、第一私の経験は、中国で生活している外国人クリスチャンと比べたら、吹けば飛ぶほどちっぽけなものだからである。

### 権利としての信教の自由

ご存知の方もたくさんおられると思うが、今の中国には、先進国が享受しているのと同じような「信教の自由」は存在しない。中華人民共和国憲法第 36 条には「中国公民は宗教信仰の自由を有す」と書かれてはいるものの、それはあくまで中国共産党の指導の下、国家が与える自由であり、それ以上でも以下でもない。

このように書くと、「そんなことはない、それは差別的な中国批判だ」という反論が寄せられることもある。たとえばかつて、中国の言論状況が深刻なレベルに達していると主張する私に対し、ある中国人研究者から「それは間違いだ。わたしは中国でおおっぴらに共産党の腐敗を批判するが、迫害にあったことは一度もないのだから」と反論されたことがある。腐敗撲滅は、共産党自らが何十年も取り組んでいる（そして一向に解決されない）問題で、これを批判しても弾圧を受けないのは不思議なことではない。そのことを以て「中国には言論の自由がある」とは決して言えないのだが、自由権についての理解が異なるので、こうした反論が出てくるのである。

あるいはこんなこともあった。文化大革命で徹底的に弾圧されたキリスト教は、1970 年

代終わりに礼拝が復活し、改革開放の時代を経て、いまでは多くの教会で日曜日の礼拝が守られ、一見福音的な説教も語られている。

では宗教活動は自由に行われているかというと、全くそんなことはない。しかしあるクリスチャンから次のように反論されたことがある。「礼拝が守られていることは何より信教の自由が確立している証拠だ。私が訪ねた教会のクリスチャンはだれもが純粋に熱心に礼拝を守っていた」と。戦時下の日本の例を引くまでもなく、教会が真面目に熱心に礼拝を守っているからと言って、彼らが信教の自由を享受しているとは限らない。今の中国の自由に対する抑圧度は、戦時下の日本や文革期ほど高くはないが、信教の自由が権利ではなく、国家つまり共産党が施す恩恵にしか過ぎないことは認識しておく必要がある。現在の中国の教会は確かに礼拝を守ることが許されており、その許容度はかつてよりもはるかに大きくなっている。とはいえ礼拝者が信教の自由や礼拝の自由の「権利」を行使しているわけではないのである。

それは先の6月4日前後に中国でいったい何が起きたのかを想起してみれば容易に理解できることである。多くの方が報道等でご存知の通り、今年には1989年に起きた天安門事件25周年に当たり、人民解放軍が民主化を要求する学生デモ隊に発砲した6月4日とそれに先立つ数日間、世界中で「母忘六四（6月4日を忘れるな）」の集会、イベントが数多く開催された。毎年6月4日が近づくと中国政府は政治活動の取締りを強化するが、今年はとりわけ警戒感をあらわにしており、事件を記念するために秘密裏に集まった勇気ある人権

派弁護士が何人も拘束された。6月4日当日には、「当日」に相当する中国語の「今天」という言葉が、中国のネットで検索できなくなるといふ笑えない冗談のような事態も起きている。

なかでも私が一番ショックだったのは、一度お目にかかったことのある家庭教会（後述）の牧師が6月4日直前に逮捕、拘束されたことである。捕まったのは、四川省成都市にある家庭教会、秋雨教会の主任牧師王怡氏である。逮捕の理由は明らかになっていないが、王牧師は政府批判を恐れることなく一貫して中国社会の問題を果敢に指摘してきた人物であるから、当局は、天安門事件を想起しようとする人々への見せしめ、警告として、逮捕理由も示さずに彼を連行したのだろうと思われる。この場合、法的な一線が明確にひかれていて、王氏はそこを踏み越えたから（法に触れたから）逮捕されたというわけでは決してない。人治のシステムを変えるべきだというのが、王氏はじめ、心ある中国人知識人が常に主張していることだが、皮肉にも王氏の主張の正しさが、彼自身の逮捕によって示されたとも言えるだろう。ともあれこのように、今の中国には権利としての信教の自由は存在していないに等しいのである（なお香港筋の情報によると、この原稿を執筆している6月6日現在、王牧師は釈放されはしたものの自宅軟禁状態に置かれている模様である）。

#### 中国の公認教会について

現在中国の教会には、二つの大きなカテゴリーがある。一つは政府が公認している教会、もう一つは家庭教会である。それぞれのカテ

ゴリーも必ずしも一色ではなく、特に家庭教会の状況は非常に複雑怪奇なのだが、公認か非公認かという点で一線を引くことは重要である。ここではまず公認教会の制度的側面を中心に説明しよう。

中国のすべての公認教会は「两会制度」の下に置かれている。两会とは、プロテスタントの場合三自愛国運動委員会と中国基督教協議会の二つの団体を指す。これらの組織に登録されている（中国語では「登記 dengji」という）教会が、いわゆる公認教会である。中国語では公認という言い方はせず、「登記 dengji」を用い、两会傘下の教会を登記教会と呼んでいる。登記教会は通称三自愛国教会とも呼ばれるが、この「三自愛国教会」は日本キリスト教会とか日本改革派教会のような「教会」では決してない。当然のことながら教会の職制も信仰告白も存在しない。党の指導と管理に甘んじる（服する）ことを表明している各個教会を、政治的に糾合したものと考えるのが妥当であろう。

两会のうち三自愛国運動委員会は、解放後間もない1954年、帝国主義勢力との決別をめざし、共産党と共に統一戦線に参加し社会主義建設を目指すという名目で設立された。「三自」とは「自伝」「自養」「自治」、すなわち伝道も財政面も運営も外国（＝帝国主義勢力）の干渉を受けずに自前で行うことを意味する。三自愛国運動委員会は、この三自原則を貫きながら愛国的な教会を目指すことを標榜しており、具体的な実務は党と各教会との調整役である（本研究所協力研究員の松谷曄介氏の言葉を借りれば、「橋渡的」連絡機関）。

两会は教職者たちが政治的にまったく自由

にかつ自発的に声を挙げて設立されたわけではなく、中国共産党の働きかけに一部の牧師が答える形で組織化されたもので、同会への参加をめぐるのは当初は多くの反対や懸念があった。ここでは論じないが、会への参加に際し、どのような背景を持つ教職者や教会がいかなる態度をとったのかは興味深いテーマである。たとえば共産主義に共鳴していたキリスト教指導者が真っ先に音頭を取ったのかというと必ずしもそうではなく、国民党筋に非常に近かった牧師が、同会の設立に積極的であったという面白い事実もある。最後まで頑として参加しなかった教会の牧師が、その後多くの辛酸をなめたことは言うまでもない。それどころか、強硬な反対論者ではないが、全面的な賛成を躊躇したというだけで迫害にあった教職者もいた。

もう一つの組織である中国基督教協議会は、文革後の1980年に設立された。この組織は教会内の教務や神学教育、教会どうしの横のつながりを管轄し、外国のキリスト教組織との交流窓口ともなっている。

以上述べてきた二つの組織、三自愛国運動委員会と中国基督教協議会は、直接的には中国国家宗教局の管理下に置かれ、さらに宗教局を中国共産党が指導しているわけである。

两会の傘下に登録されている教会は、歴史的には様々な教派的背景を持っている。中国の場合、公会主義が早い段階で挫折した日本と比べると、当初から教派を超えた伝道が志向される動きが目立っていた。1807年に広州に到着しプロテスタントの中国伝道に先鞭をつけたのは、超教派のロンドン伝道会に所属するロバート・モリソンであったし、中国最

大規模の伝道団体は、ハドソン・テイラーが教派色を排して 1865 年に設立した中国内地会であった。

中国における教会形成の歴史に目を転じると、そこはやはり長老派、改革派の活躍が際立っている。しかしながらこれもまた当初から、アメリカ北部長老教会とか、アメリカ・オランダ改革教会などの母教会の子どもにあたる教会を中国に建設することよりも、長老主義という点を重視し、長老制をとっていたり、長老制に理解のある教会間の協力が積極的に模索された。最もわかりやすいのは、英国長老教会とアメリカ・オランダ改革教会による厦門における中会形成である。

このように中国のプロテスタント諸教会の「教派主義」は、歴史的に日本よりも緩やかだったといえるが、人民革命後の中国の教会から教派が消滅したのは、十分な神学的議論の末ではなく、すぐれて政治的な理由からである。教派主義を克服し、すべての教会が教理面での十分な討議を重ねて教会の一致を成し遂げたのではない。両会の指導の下に置かれているとはいえ、そこには教会論的考察はなく、「三自教会神学」があるわけでもない。超教派とか、ポスト教派という聞こえがいいが、むしろ教派的伝統から切り離され、受け継ぐべきものが大事にされていない弊害は非常に大きいと私は考えている。

「中国にはどのぐらいのクリスチャンがいるのですか？」中国のキリスト教の話になると一番よく聞かれるのがこの質問である。答えはあっけないほど簡単で「わかりません」である。現代中国キリスト教事情の専門家ですら正確な数はつかめていない。日本のクリ

スチャン人口 100 万人弱という数字も実態とは異なるようだが、中国の場合は、そういうレベルではなく、本当にわからないのである。なぜなら、両会に所属していない非公認（非登記）の教会の実数が全くつかめていないからだ。これらがいわゆる家の教会である。

登記教会の数は 56,000、信徒数はおよそ 2500 万前後だというのが、これも正確な数とは言えない。というのも私が見たり聞いたりしている限り、各教会がメンバーシップを確立し、教会員ひとりひとりが教会の枝として応分の責任を果たすという、私たちからすれば当たり前の規則がないらしいからである。毎年の受洗者数はデータとして出ているものの、会員名簿のようなものは存在しないと聞いたこともある。その理由が何のなのかについて、私が研究仲間と一昨年設立した小さな研究会「中華圏プロテスタント研究会」で議論されたことがあった。一つの理由としてあげられたのは、名簿を作成すると万が一迫害が起きた時一網打尽にされてしまうというもの。なるほど、いまだに信教の自由が条件付きである状況の下、こうした知恵がはたらくのもわからないではない。しかし私はそれとは逆に、メンバーシップを確立するとは、教会の自立を意味することであり、それは当局が最も毛嫌いするからではないかと推測している。

正確ではないにしても大体の数字が出ている登記教会の信徒数に対し、家の教会の数や信徒数は全くわからないが、どう少なく見積もっても数千万にのぼるだろうというのが大方の見方である。登記教会の信徒数を合わせると、中国のクリスチャン人口は優に一億を超えるという人もいる。もしそうであるなら、

中国の総人口 13 億強に対するクリスチャン人口の比率は、10 パーセントに迫る規模だということになる。

だとすると、中国はフィリピン、韓国に次ぐキリスト教が盛んな国ということになるが、大事なのは、それがどんなキリスト教なのかを問うことであろう。

わたしはこれまで何度か複数の登記教会に出席したことがあるが、一部を除いて（この一部については、次号で紹介したい）雰囲気はどれも似たり寄ったりで、リタージも説教の中身も教会によって多少の違いはあるものの、一部の人たちが想像しているような「リベラル」さを感じたことは一度もない。礼拝の前に賛美歌練習が設けられている教会も多く、礼拝の中でも皆大きな声で元気に歌っている。礼拝での祈りは熱心ではあるけれど熱狂的ではなく、日本キリスト教会育ちの私などは、韓国の福音派系の教会よりもずっとしっくりくるほどである。日本の教会と一番違っているのは、居眠りが非常に少ないということだろうか。

最後に余談になるが、これも中国のキリスト教の一側面であるから記しておこう。私は今回の滞中時に大連、武漢、上海の教会での英語礼拝にも出席した。International Christian Fellowship と呼ばれる集会で、外国人が比較的多く居住している大きな都市で、各市の宗教局が許可している集まりである。これらの集会は原則として台湾、香港籍を除く中国人の参加は禁止されている。そのため私が入っていこうとすると、必ずと言っていいほど「中国人はダメです」と言われ、いちいち「日本から来た」と答えなくてはならな

かった。（最近では外国人による英語礼拝とは別に、中国人が参加できる英語礼拝も設けられているところも出てきてはいる）。

現在中国の大学では、政府の対アフリカ積極政策にともなって、多数のアフリカ人留学生が主に医学部、理工系、ビジネス系のコースで学んでいるが、大連と武漢の集会にはそれが見事に反映されていて、参加者の 8 割以上が黒人の学生といった具合だった。武漢では、フランス語を母語とする留学生に配慮して英語に加えてフランス語も用いられていた。私が出席した時は、カメルーン人の若い牧師がフランス語で長い説教をし、そのわきで黒人女性が同時通訳をしていた。説教の冒頭で牧師本人が「聖霊の導きに応じて時々英語を使います」と英語で述べたのだが、その言葉通り、興奮してくると母語ではない英語が出てきたりして、なかなか面白かった。

外国人向けの英語礼拝の雰囲気は集会によってさまざまなのだろうが、登記教会よりはるかに福音派的でエヴァンジェリカルであることは間違いないだろう。バンドをバックにマイクを握った信徒がポップス調の讃美歌を歌い、参会者はそれに合わせて両手を挙げて体を揺らす。感情が高ぶってくると、体の揺れはどんどん大きくなって、恍惚とした表情をする人まで現れて、わたしなどは身の置き場に困ってしまうことも少なくなかった。こうした賛美歌演奏が延々一時間続き、いったいどうなるのかと黙っていたらようやく説教が始まるという具合である。（次号に続く）

（わたなべ・ゆうこ 教養教育センター教授、所長）



1899年、ドイツ神言会が山東省兗州に建てた、当時としては中国屈指のカトリック教会堂 撮影渡辺

## 雑録

6月からキリスト教課外講座が始まった。本学ではキリスト教学校に奉職する学生が思いの外少ないこと、一方でキリスト教学校は世代交代の時期を迎え、キリスト者、キリスト教教育に理解ある教員を広く求めているというミスマッチを埋めるため、教学改革プロジェクトとして教養教育センターで始めたものだが、資料の準備などでキリスト教研究所も協力している。

青山学院などで行われてきたキリスト教学校教育同盟の後継者養成講座に準ずるものだが、手探りで始めたこともあって、学内で十分な周知をできなかった。それにもかかわらず1年生から4年生まで10名弱の学生が受講することとなった。

明治以来教育においてキリスト教は少なからぬ影響力を持ってきた。良くも悪くも日本人が最初にキリスト教に触れるのは、教会よ

りも学校である。キリスト教教育の担い手の責任はその意味で大きい。

けれども初回の講座を終えて実感したのは、責任や使命感に先立つものがあるということだ。希望と喜びがあって人は人間らしく生きられる。「絶望に瀕してもなお希望があることを伝えられるのが、キリスト教教育」との講師の言葉は学生たちの心にも響いたようである。

(うえき・けん 教養教育センター准教授、主任)

## 研究所活動 (4月から7月)

### 所員会議

#### 第1回

開催日時：2014年4月23日(水) 14:00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

#### 第2回

開催日時：2014年5月28日(水) 14:00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

#### 第3回

開催日時：2014年6月25日(水) 14:00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

#### 第2回

開催日時：2014年7月19日(土) 13:30-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

### 1日研究会

開催日時：2014年7月19日(土) 15:00-

開催場所：白金校舎本館 92 会議室

発表①

「浦上潜伏キリシタンの信仰—伝来書物を手掛かりにして—」

発表者：清水有子（客員研究員）

コメント：手塚奈々子（経済学部教授、所員）

発表②

「構造的差別を克服するために—沖縄におけるキリシト教宣教の歴史から—」

発表者：池尾靖志（客員研究員）

コメント：一色哲（帝京科学大学教員、協力研究員）

懇親会

開催日時：2014 年 7 月 19 日（土）18：00-

開催場所：目黒インドネシア料理セデルハナ

戦後の宣教師研究プロジェクト研究会

第 1 回

開催日時：2014 年 4 月 17 日（木）13：00-

開催場所：白金校舎本館キリシト教研究所

第 2 回

開催日時：2014 年 5 月 23 日（金）13：00-

開催場所：白金校舎本館キリシト教研究所

第 3 回

開催日時：2014 年 6 月 20 日（木）13：00-

開催場所：白金校舎本館キリシト教研究所

キリシト教と平和学・赦しと和解研究プロジェクト公開研究会

「中国における平和学の現状」

開催日時：2014 年 6 月 20 日（金）16：00-

開催場所：白金校舎本館 92 会議室

講師：劉成（南京大学歴史学部教授）

通訳：張思凡（南京大学大学院生）

司会：池尾靖志（客員研究員）

アウシュヴィッツのkolベ神父原画展

「絶望からの希望」

開催期間：2014 年 7 月 1 日から 7 月 11 日

開催場所：白金校舎キリシト教研究所

「台湾の日本軍「慰安婦」被害者たちの回復への道のり—映画「蘆葦の歌」上映会」

開催日時：2014 年 7 月 4 日（金）16：45-

開催場所：白金校舎本館 1253 教室

映画「蘆葦の歌」（婦援会制作、上映時間 76 分）上映

〈トーク〉

呉秀菁（国立台湾芸術大学電影学系助理教授、監督）

康淑華（婦女救援社会福利事業基金會 執行長）

渡辺信夫（牧師・台湾の元「慰安婦」裁判を支援する会代表）

青砥祥子（通訳）

主催：明治学院大学キリシト教研究所/ 台湾の元「慰安婦」裁判を支援する会

後援：明治学院大学国際平和研究所

キリシト教芸術研究プロジェクト公開研究会

「キリシト教芸術音楽の研究対象と研究方法」

開催日時：2014 年 7 月 10 日（木）16：45-

開催場所：白金校舎本館 94 会議室

講師：加藤拓未（協力研究員）

司会：池尾靖志（客員研究員）

キリスト教研究所提供科目明治学院研究1  
フィールドワーク

築地編

開催日：2014年6月9日（土）

引率責任者：中島耕二（教養教育センター客  
員教授、協力研究員）

横濱編

開催日：7月5日（土）

引率責任者：司馬純詩（国際学部教授、所員）

賀川豊彦学会

「あらゆるものを全体から見る姿勢—『科学的な神秘主義者』である賀川豊彦—」

発表：トマス・ヘイスティングス（日本国際  
基督教大学財団ニューヨーク主任研究員、元  
東京神学大学教授）

開催日時：2014年7月26日（土）

開催場所：白金校舎本館 92 会議室

主催：賀川豊彦学会

共催：明治学院大学キリスト教研究所

田知志・宋富子著、明治学院 150 周年委員会  
編、いのちのことば社、2014。（小暮修也先生  
寄贈）

・『自治体の平和力』池尾靖志著、岩波書店、  
2012。（著者寄贈）

・『現代聖書注解 ローマの信徒への手紙』、P.  
アクティマイアー、村上実基訳、日本キリス  
ト教団出版局、2014。

## 新着図書（4月から7月）

- ・『福音と世界』No. 4、新教出版社、2014。
- ・『福音と世界』No. 5、新教出版社、2014。
- ・『福音と世界』No. 6、新教出版社、2014。
- ・『福音と世界』No. 7、新教出版社、2014。
- ・『福音と世界』No. 8、新教出版社、2014。
- ・『日本基督教団年間』、日本基督教団事務局、  
2013。
- ・『灯を輝かし、闇を照らす—21世紀を生き  
る若い人たちへのメッセージ』、佐藤彰・奥

---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第64号

---

2014年7月19日 発行  
明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214  
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩

## 2014年度キリスト教研究所メンバー

所長 渡辺祐子

主任 植木献

### 所員

教養教育センター：植木献、嶋田彩司、永野茂洋、渡辺祐子

文学部：久山道彦、齊藤栄一、播本秀史

経済学部：鶴殿博喜、大西晴樹、手塚奈々子

社会学部：坂口緑、佐藤正晴、深谷美枝

法学部：鍛冶智也

国際学部：司馬純詩

(以上15名)

### 名誉所員

遠藤興一、小田島太郎、加山久夫、久世了、佐藤寧、柴田有、千葉茂美、  
辻泰一郎、中山弘正、新倉俊一、橋本茂、花田宇秋、真崎隆治、丸山直起、  
水落健治、森井眞、山崎美貴子、吉田泰

(以上18名)

### 客員研究員

池尾靖志、清水有子

(以上2名)

### 協力研究員

Andrew H. Ion、石川理、石本東生、一色哲、稲垣久和、今村正夫、岩崎次郎、  
岩田ななつ、岡部一興、加藤拓未、北川一明、木村一、清澤達夫、小暮修也、  
小林孝吉、齋藤元子、佐藤飛文、島田由紀、下村優、徐亦猛、鈴木進、徐正敏、  
孫永律、高井ヘラー由紀、田中浩司、辻直人、手代木俊一、豊川慎、中井純子、  
中島耕二、原豊、牧律、松谷嘩介、丸山義王、宮坂弥代生、村上志保、村上文昭、  
吉馴明子

(以上38名)